巻頭

猪熊葉子

最近ある停留所でバス待ちをしていた時のことである。近くの公園にでもいってきたらしい保育園の子どもたちが三十人ほど、ふたりずつ手をつないで近づいてきた。その停留所のうしろはガソリンスタンドで、折から一台の車が大ジャッキで空中にしずしずともちあげられていくところだった。大きな車が徐々に空中に浮き上がっていくさまは、おとなが見てもなかなかおもしろい。そこで私は通りがかった子どもたちがきっと立ち止まってながめるにちがいないと考えた。ところがその予想は見事はずれてしまった。子どもたちの大部分はただおとなしく先生のあとをついて通り過ぎていき、車の方に目をむける者はほとんどいなかったのである。ちらりと見る者はあるにはあっても、わざわざ立ち止まってまで見ることはない。今時の子どもたちにとって、こんな光景は珍しくもなんともないものなのだろうか。それとも「外に出たらおぎょうぎよくしましょう。ちゃんと並んで静かに歩くのですよ」というたぐいの先生の教えが好奇心にブレーキをかけていたのであろうか。

すると、皆から三、四メートルおくれてぶらぶらやってくる一組が目についた。男の子が歩道でみつけた石ころをけとばしてみたり、歩道沿いにはしっている

さくの上につもった砂ぼこりを指でしごきおとしてみたりしているので、相棒の女の子の方もついつりこまれ、いっしょに道草をくっていたものらしい。

この一組はあの空中に持ちあげられた自動車にどんな反応を示すだろうか。この子どもたちは足をとめ、日ごろは見ることのできない車の裏側を、おもしろがってのぞいてみるのではないだろうか。

案の定ふたりは立ち止まった。たちまち好奇心を表情にあらわした子どもたちは、ジャッキのすぐ下にかけより、自動車を指さしては何やらうれしげに話しあっている。そのうち先生のひとりが気づき、小走りに戻ってきた。始め先生はふたりが列と離れたことをたしなめていたようだったが、そのうちふたりの説明を理解したらしい先生は、ほかの子どもたちにも見せてやったらいいと思いついたようすで、先の方を進んでいく一行に声をかけて呼びもどした。すると一行はまた黙々と、子羊の群ででもあるかのように、もとへもどってきた。先生がわざわざよびもどしたからには何かあるらしいぞ、と好奇心にかられた顔つきをしている子どもたちはほとんどなかった。大方の子どもは無表情で、先生が車を指さしながら話をしているのを黙って聞いているだけだった。そのうち待っていたバスが来てしまったので、私の観察は自然そこで終わった。だが私の心から久しぶりに見たこの大勢の子羊のような子どもたちの姿がしばらく消えなかった。

子どもたちのすべてが自動車に興味をもつことは考えられないし、それに自動車が子どもたちの好奇心の対象としてふさわしいものであるともいえないだろう。またあの時見かけた子どもたちの姿から、現在の子どもたちは、すべて幼年時代を特徴づける旺盛な好奇心を欠いていると断じることも誤りであろう。そう考えはするのだが、どうしても私は自分を納得させることができなかった。

かつてイギリスの浪漫派詩人コールリッジは、幼い息子ハートレイが遊びたわむれているさまを、さらさら流れる小川や、風にかろやかに舞うポプラの葉にたとえた。子どもがいきいきした好奇心をアンテナにして外界にじかに触れている時、子どもはあのようにだまりこくった無表情な子羊にはならないのではなかろ

うか。

しかし、すべてとはいわないが少なくとも一部の子どもたち、人生のなかでも一番好奇心の旺盛に働くはずの幼児から、そのいきいきした好奇心が失われかけているように思われるのは一体なぜなのだろう。それは、子どもたちがひとりひとり独自の好奇心を働かすことを邪魔しているものが、子どもたちの置かれている環境のなかにあるからにちがいない。

詩人であるばかりでなく教育に対してすぐれた提言をしたコールリッジは、子どもを「目の専制から解放せよ」と説いた。その言葉を借りるなら、現在の子どもたちは、目ばかりか耳の専制からも解放されなければなるまい。なぜなら現在、あまりにも大量の規格的、画一的、功利的インフォメーションが、時には「事実」の名のもとに、時には「理想」の美名にかくれてさまざまな媒体を通じ、日々子どもの目や耳からとびこんでくるからである。そして子どもたちの目や耳はそれらのインフォメーションによって占領されてしまっている。その結果、その目や耳の働きは型にはめられ、独自の働きをしなくなってしまっているのである。子どもたちが本来そなえているはずの、それこそ幼児期の一大特徴ともいうべき旺盛な好奇心が鈍っていくのはそのためではないのか。そういう状況が存在することが、なまの事物に直接ぶつかって、そこから成長に役立つものを吸収することを不可能にしてしまっているのである。今日の子どもたちが、コールリッジの描いた「本当の子ども」のイメージである風に舞うポプラの葉からほど遠い姿であるのは、そのためではないのだろうか。

現在幼児教育の場で真剣に考えなければならないことが、ここにひとつあると私には思われる。このままいつまでも手をつかねたまま子どもたちを「目や耳の専制」にゆだねておいてはいけない。外部からたえず子どもをめがけて発射されてくるインフォメーションから子どもを人工的に隔離する方策を講じなくてはいけないのではないか。子どもが事物にじかに出会うことのできる状況をつくり、子どもたちのうちにそなわってるもろもろの能力―好奇心はそれらをいきいきと働かせるために欠くべからざるものである―を引き出すことを考えなくてはいけないのではないか。そのた

めに、一番てっとり早い方法のひとつは、幼稚園などでは子どもをいつも集団のなかにとかしこむことばかりをせずに、時にはひとりにすることだと私は思うのである。

幼稚園は、社会性を養い、創造性を開発するなど、さまざまなプログラムをかかえている。そしてそれらはいずれも、集団で行なわれるのが普通である。だが、そういう集団で行なうプログラムを思いきってへらし、ひとりひとりの子どもがひとりで自由にしたいことをするような時間を大幅にふやしてみたらどうなのだろうか。そういう時間には、原則として子どもはひとりで行動する。だが友だちと遊びたくなったらいつでもそれを許してよい。家庭ではこういう点がうまくいかない。ひとり遊びはできるかもしれないが、気のむいた時に、いつでも友だちを得られるとは限らないからだ。

外国の小学校のなかには、低学年の児童にこういう試みを実行しているところもあると聞く。だがこのような試みは、幼稚園の段階で行なうことが、さらに有効なのではないかと思われる。もし幼稚園でもすでに行なわれているならば、その実態をぜひ知りたいものである。

右のようなことを実行に移すとなれば、保育料を払っているのに、幼稚園では何も教えてくれないのは困るという苦情が親から出ることが当然予想される。どんなに意義のある試みであっても、それが親に理解されなくては実を結びはしない。だから、幼稚園の保育の内容を変えていくためには、まず親の教育から始めなくてはならないだろう。逆説になるが、もし親やおとなの意識を改造することに成功するなら、幼稚園のあり方をそうそう変えなくてもすむかもしれないのである。今日、ひとり幼児の教育のみならず、教育一般のかかえている数々の矛盾の解決には、おとなの意識改造を行なう以外にないのではないか。だからそのための具体的なプログラムを作るのが先決問題であろう。